ポリュカルポスの殉教

スミルナの教会
藤遥　制作

あいさつ、1〜6章　殉教者たちの忍耐、町を離れたポリュカルポス

0:1 スミルナに寄留している神の教会から、ピロメリオンに寄留している神の教会へ。また、あらゆる所にある、聖なる公同の教会のすべての寄留の群れへ。父なる神と、わたしたちの主イエス・キリストの、あわれみと平安と愛とが、豊かに加わりますように。

1:1 兄弟たちよ。わたしたちは、殉教した人々と、幸いなポリュカルポスのことを、あなたがたに書き送ります。ポリュカルポスは、自分の殉教によって、いわば封印をして、迫害を終わらせました。実際、先に起きたことは、ほとんどすべて、主が天から、福音にしたがった殉教をわたしたちに示されるために起きたのです。1:2 彼は、主と同じように、引き渡されるのを待っていたのです。わたしたちも、自分のことばかりでなく、隣人のことも考えて、彼にならう者となるためです。まことの確かな愛とは、自分が救われることだけを望むのでなく、兄弟たちすべてが救われることも望むことだからです。

2:1 ですから、神のみこころにしたがって起きた殉教は、どれも幸いで、気高いものです。実際、わたしたちは、いっそう畏敬の心をもって、すべてを治める権威を神に帰さなければなりません。2:2 実際、彼らの気高さと忍耐と、主への忠実に、驚嘆しない者がいるでしょうか。彼らは、むちで肉を裂かれ、からだの内側の静脈や動脈に至るまで、肉のしくみが見えるほどになっても、耐え忍びました。そばに立つ人々も、あわれんで嘆き悲しむほどでした。ある人々は、だれ一人、声も立てず、うめきもしないほどの気高さに達しました。こうして、キリストの最も気高い殉教者たちが、その責め苦のさなかに肉を離れていたことを、わたしたちすべてに示したのです。いや、むしろ、主がそばに立って、彼らと語り合っておられたことを示したのです。2:3 彼らは、キリストの恵みに心を向けて、世の責め苦を軽んじました。わずか一時によって、永遠のいのちを買い取りながらです[1]。非情な責め手たちの火も、彼らには冷たいものでした。実際、彼らは、永遠の、決して消えることのない火を逃れることを、目の前に置いていたのです。また、心の目で、耐え忍んだ者たちのために取っておかれている良いものを、仰ぎ見ていました。それは、耳がまだ聞かず、目がまだ見ず、人の心に思い浮かびもしなかったものです。しかし、それが彼らには、主によって示されていました。彼らは、もはや人ではなく、すでに御使いでした。2:4 獣の刑を言い渡された人々も、同じように、恐ろしい刑罰を耐え忍びました。とがった貝殻の上に寝かされ、ほかにもさまざまな責め苦で罰せられながらです。暴君が、できることなら、絶え間ない刑罰によって、彼らを否むことへ向かわせるためでした。実際、悪魔は、彼らに対して多くのたくらみをめぐらしていたのです。

3:1 しかし、神に感謝します。実際、悪魔は、すべての人に打ち勝ちはしませんでした。最も気高いゲルマニコスは、自分のうちにある忍耐によって、臆病になっていた人々を励まし強めたのです。彼は、獣とみごとに戦いました。地方総督が彼を説き伏せようとして、若い身をあわれむよう言ったとき、彼は、獣を無理に自分のほうへ引き寄せたのです。あの者たちの不正で不法な生き方から、早く解き放たれることを望んだからです。3:2 そこで、群衆はみな、神に愛され、神を敬うキリスト者の民の気高さに驚嘆して、叫びました。「無神論者どもを除け。ポリュカルポスを捜し出せ」

4:1 ところが、クイントスという名の一人のフルギヤ人は、フルギヤから来たばかりでしたが、獣を見て、おじけづきました。この人こそ、自分も、ほかの何人かも、進んで名のり出るよう駆り立てた者でした。地方総督は、しきりに懇願して、彼を説き伏せ、誓わせ、いけにえをささげさせました。それゆえ、兄弟たちよ。わたしたちは、自分から身を差し出す者たちをほめません。福音はそのように教えていないからです。

5:1 さて、最も驚嘆すべきポリュカルポスは、初めにこれを聞いたとき、うろたえず、町にとどまろうとしました。しかし、たいていの人は、ひそかに町を出るよう、彼を説き勧めました。そこで彼は、町からあまり離れていない小さな農場

にひそかに移り、わずかな人々と共にそこで過ごしました。夜も昼も、ほかのことは何もせず、すべての人と、全世界の諸教会のために祈っていました。それが彼の習いでした。5:2 捕らえられる三日前、祈っているうちに、彼は幻を見ました。自分の枕が火で焼かれているのを見たのです。そして、振り向いて、共にいる人々に言いました。「わたしは生きたまま焼かれなければならない」

6:1 彼を捜す者たちがなおも捜し続けたので、彼は別の小さな農場に移りました。するとすぐに、捜す者たちがやって来ました。彼を見つけられなかったので、召使いの少年を二人捕らえました。そのうちの一人が、責めさいなまれて、白状しました。6:2 実際、彼が隠れおおせることはできませんでした。彼を裏切った者たちは、彼の家の者たちだったからです。また、治安長官は、あのヘロデと同じ名をあてがわれ、ヘロデと呼ばれていました。彼は、ポリュカルポスを競技場に引き出そうと急いでいました。それは、ポリュカルポスがキリストにあずかる者となって、自分の分を全うするためでした。また、彼を裏切った者たちが、ユダ自身と同じ罰を受けるためでした。

訳注

1 多くの写本は『永遠の刑罰を免れながら』と読む。

7〜12章　捕らえられたポリュカルポス、地方総督との問答

7:1 そこで、警吏と騎兵たちは、召使いの少年を連れて、準備の日の夕食のころに出て行きました。いつもの武器を持ち、強盗にむかうように駆けて行ったのです。夜遅く、彼らはそろって押し寄せ、屋上の間で横になっている彼を見つけました。彼は、そこからでも、ほかの所へ逃れることができました。しかし、それを望まず、言いました。「神のみこころが行われますように」 7:2 彼は、彼らが来たと聞くと、下りて行って、彼らと語り合いました。そこにいた者たちは、彼の年齢と落ち着きに驚嘆しました。また、これほどの老人を捕らえるのに、これほど熱心だったのかと、いぶかりました。彼はすぐに、その時刻に、彼らが望むだけ飲み食いできるものを出すよう命じました。そして、心おきなく祈るために一時間をくれるよう、彼らに願いました。 7:3 彼らが許すと、彼は立って祈りました。神の恵みに満たされていたので、二時間も黙ることができないほどでした。聞いていた者たちは驚き入りました。多くの者が、これほど神にかなう老人を捕らえに来たことを悔いました。

8:1 彼は祈りの中で、すべての人を覚えました。かつて出会ったことのある人々を、小さい者も大きい者も、名の知られた者も知られない者も覚えました。全世界の公同の教会のすべても覚えました。ようやく彼が祈りを終えると、出発の時が来ました。彼らは彼をろばに乗せて、町へ連れて行きました。大いなる安息日のことでした。 8:2 治安長官ヘロデと、その父ニケテスが、彼を出迎えました。二人は彼を自分たちの馬車に移し、そばに座って説き伏せようとしました。「『カイザルは主』と言い、いけにえをささげ、そのほかのこともして、助かることに、何の悪いことがあるのか」と言ったのです。彼は、初めは答えませんでした。しかし、二人がなおも言い続けたので、言いました。「あなたがたの勧めることを、わたしはするつもりはない」 8:3 二人は、彼を説き伏せることができなかったので、恐ろしい言葉を浴びせ、急いで彼を降ろしました。そのため、彼は馬車から降りるときに、すねをすりむきました。しかし、彼は振り返りもせず、何事もなかったかのように、進んで急ぎ足で歩いて行きました。競技場へ引かれて行ったのです。競技場は、だれの声も聞き取れないほどの騒ぎでした。

9:1 ポリュカルポスが競技場に入って行くと、天から、「ポリュカルポスよ、強く、また雄々しくあれ」という声がありました。語った者の姿は、だれも見ませんでした。しかし、その場にいたわたしたちの仲間は、その声を聞きました。それから彼が引き出されると、ポリュカルポスが捕らえられたと聞いて、人々が大騒ぎをしました。 9:2 彼が引き出されると、地方総督は、彼がポリュカルポス本人かと尋ねました。彼がそうだと認めると、地方総督は、否むよう説き伏せようとしました。「おまえの年を考えよ」と言ったのです。さらに、「カイザルの守護霊にかけて誓え。悔い改めよ。『無神論者どもを除け』と言え」と、彼らがいつも言うようなことを言いました。しかしポリュカルポスは、競技場にいる不法な異邦人の群衆をみな、厳しい顔で見渡しました。そして、彼らに向かって手を振り、うめき、天を仰いで言いました。「無神論者どもを除け」 9:3 地方総督はなおも迫って、「誓え。そうすれば放してやる。キリストをののしれ」と言いました。ポリュカルポスは言いました。「八十六年のあいだ、わたしはこの方に仕えてきた。この方は、わたしに何一つ悪いことをされなかった。わたしを救ってくださったわたしの王を、どうしてそしることができようか」

10:1 地方総督がまたも、「カイザルの守護霊にかけて誓え」と言い張ると、彼は答えました。「あなたは、わたしがあなたの言うとおりに、カイザルの守護霊にかけて誓うと、むなしく思い込んでいるのか。そして、わたしが何者かを知らないふりをしているのか。それなら、はっきり言うから、聞くがよい。わたしはキリスト者だ。キリスト教の教えを学びたいのなら、一日をくれ。そして聞くがよい」 10:2 地方総督が「民衆を説き伏せてみよ」と言うと、ポリュカルポスは言いました。「あなたなら、話をするにふさわしい相手と認めもしよう。わたしたちは、神によって立てられた支配者と権威ある者に、しかるべき誉れを与えるよう

教えられているからだ。わたしたちを損なわない限りの誉れである。しかし、あの者たちは、わたしが弁明するにふさわしい者とは思わない」

11:1 地方総督が、「獣ならいるぞ。悔い改めないなら、おまえを獣に投げ与える」と言うと、彼は言いました。「呼ぶがよい。より良いものからより悪いものへ悔い改めることは、わたしたちにはありえないからだ。しかし、むごいことから正しいことへ移るのは、良いことだ」 11:2 地方総督がまた、「獣を侮るなら、悔い改めない限り、おまえを火で焼き尽くさせる」と言うと、ポリュカルポスは言いました。「あなたは、一時燃えて、間もなく消える火でおどしている。来たるべきさばきと永遠の刑罰との火が、不敬虔な者たちのために取っておかれている。それを、あなたは知らないのだ。それにしても、なぜぐずぐずしているのか。さあ、望むとおりにするがよい」

12:1 彼は、これらのことや、ほかにも多くのことを語りながら、勇気と喜びに満たされていきました。その顔は恵みにあふれていました。そのため、彼は、自分に向けて言われたことに心を乱して、くずおれなかったばかりではありません。かえって、地方総督のほうが驚きあきれ、自分の触れ役を遣わして、競技場の真ん中で三度触れさせました。「ポリュカルポスは、自分がキリスト者であると告白した」 12:2 触れ役がこう言うと、スミルナに住む異邦人とユダヤ人の群衆はみな、抑えきれない怒りに燃えました。そして、「こいつがアジヤの教師だ。キリスト者どもの父だ。われわれの神々を倒す者だ。多くの者に、いけにえをさげるな、拝むなと教えている者だ」と大声で叫びました。彼らはこう言って叫び、ポリュカルポスに獅子を放つよう、アジヤ祭司長ピリポに求めました。しかし彼は、獣の見世物はもう終えたので、自分にはそれが許されていない、と言いました。 12:3 そこで彼らは、口をそろえて、ポリュカルポスを生きたまま焼けと叫ぶことにしました。枕について彼に示された幻が、成就しなければならなかったのです。祈っているうちに、枕が焼かれているのを見たとき、彼は振り向いて、共にいる信者たちに預言して言いました。「わたしは生きたまま焼かれなければならない」

13〜18章　ポリュカルポスの祈りと火刑、遺骨の埋葬

13:1 こうして、これらのことは、言い終わるよりも早く、またたく間に行われました。群衆はすぐさま、仕事場や浴場から、薪やたきつけを集めて来ました。とりわけユダヤ人が、いつものように、進んでこれに手を貸しました。13:2 薪の山が整うと、彼は自分で上着をみな脱ぎ、帯を解きました。そして、自分で履物も脱ごうとしました。それまでは、これを自分ですることがありませんでした。信者たちがいつも、だれが先に彼の肌に触れるかと、競い合っていたからです。彼は良い生き方をしていたので、殉教の前から、あらゆる良いもので飾られていたのです。13:3 すぐに、薪の山のために整えられた道具が、彼のまわりに取り付けられました。彼らが彼を釘付けにもしようとすると、彼は言いました。「このままにしておけ。火を耐え忍ぶ力をくださる方が、身じろぎもせずに薪の上にとどまる力もくださるからだ。あなたがたが釘で留めておかなくてもだ」

14:1 そこで彼らは、釘付けにはせず、彼を縛り付けました。彼は両手を後ろに回して、縛られました。大きな群れの中から供え物にされる、えり抜きの雄羊のようでした。神に受け入れられる燔祭として、整えられていたのです。彼は天を仰いで言いました。「全能者にして主なる神よ。あなたの愛する、ほむべきしもべイエス・キリストの父よ。わたしたちは、この方によって、あなたを深く知るようになりました。御使いたちと力ある者たちと、すべての造られたものの神よ。あなたの前に生きる、義人の種族すべての神よ。14:2 わたしはあなたをほめたたえます。あなたが、わたしをこの日、この時にふさわしい者としてくださったからです。わたしが殉教者たちの数に加わり、あなたのキリストの杯にあずかるのにふさわしい者としてくださったのです。それは、魂もからだも、聖霊による朽ちないことのうちに、永遠のいのちのよみがえりに至るためです。その人々の中で、わたしが今日、肥えた、受け入れられるいけにえとして、あなたの前に受け入れられますように。偽りのない、まことの神よ。あなたが前もって備え、前もって示し、そして成し遂げられたとおりにです。14:3 それゆえ、わたしはすべてのことについても、あなたを賛美し、あなたをほめたたえ、あなたをあがめます。永遠の、天の大祭司、あなたの愛するしもべイエス・キリストによってです。この方によって、この方と聖霊と共に、あなたに栄光が、今も、また来たるべき世々にもありますように。アーメン」

15:1 彼がアーメンと唱えて、祈りを終えると、火の係の者たちが火をつけました。大きな炎が燃え上がると、わたしたちは、見ることを許された者として、驚嘆すべきことを見ました。わたしたちが守られたのは、起こったことをほかの人々に知らせるためでした。15:2 火は丸天井の形をつくり、風をはらんだ船の帆のようになって、殉教者のからだを壁のように囲んだのです。彼はその真ん中にいました。燃える肉のようではなく、焼かれているパンのようでした。あるいは、炉で精錬される金や銀のようでした。また、わたしたちは、乳香か、何かほかの高価な香料がかおるかと思うほどの、かんばしいかおりをかいだのです。

16:1 ついに、不法な者たちは、彼のからだを火で焼き尽くせないのを見ました。そこで、とどめを刺す役の者に、近寄って短剣を突き刺すよう命じました。その者がそうすると、鳩[1]と、おびただしい血とが出てきました。そのため、火は消え、群衆はみな、不信者と選ばれた者とのあいだに、これほどの違いがあるのかと驚嘆しました。16:2 この最も驚嘆すべき殉教者ポリュカルポスも、その選ばれた者たちの一人でした。彼は、わたしたちの時代に、使徒のような、また預言者のような教師となりました。スミルナの公同の教会の監督でした。彼が口から出した言葉はみな、成就しましたし、これからも成就するのです。

17:1 しかし、ねたむ者、そねむ者、悪い者、義人の種族に敵対する者は、彼の殉教の偉大さを見ました。また、初めから非難するところのない彼の生き方も見ました。彼が朽ちない冠をかぶせられ、疑いようのない賞を勝ち取ったのも見ました。そこで、その者は、わたしたちが彼の亡骸さえ引き取ることのないようにたくらみました。多くの者が、そうすることと、彼の聖なる肉体にあずかること

を願っていたのにです。17:2 そこで、その者は、ヘロデの父で、アルケの兄弟であるニケテスをそそのかしました。長官に願い出て、彼のからだを渡さないよう頼ませたのです。ニケテスは、「あの者たちが、十字架につけられた者を捨てて、この男を敬い始めるといけない」と言いました。彼らがこう言ったのは、ユダヤ人がそそのかし、けしかけたからです。ユダヤ人は、わたしたちが彼を火の中から取り出そうとしたときにも、見張っていました。しかし彼らは、わたしたちがキリストを決して捨てることができないことを知りませんでした。この方は、全世界の救われる者たちの救いのために、罪のない方でありながら、罪人のために苦しまれたのです。また、わたしたちがほかのだれをも敬うことができないことも、知りませんでした。17:3 わたしたちは、この方を神の子として拝むからです。しかし殉教者たちは、主の弟子、また主にならう者として、ふさわしく愛します。自分の王であり師である方に彼らが抱いた、比べるもののない真心のゆえにです。わたしたちも、彼らの仲間となり、共に弟子となることができますように。

18:1 そこで、百卒長は、ユダヤ人が起こした争いを見て、彼を真ん中に置き、自分たちのいつものやり方で焼きました。18:2 こうして、わたしたちは後になって、彼の骨を拾い上げました。高価な宝石よりも尊く、金よりもまさった骨です。わたしたちはそれを、納めるのにかなう所に納めました。18:3 主は、わたしたちができる限りそこに集まり、彼の殉教の誕生日を祝えるようにしてくださるでしょう。大いに喜び楽しみながらです。それは、先に戦い抜いた人々を記念するためです。また、これから戦う人々を鍛え、備えさせるためです。

訳注

1 最も古い引用には『鳩と』がなく、後の時代の加筆とみられる。

19〜22章、モスクワ写本の結び　手紙の結びと、写した者たちの付記

19:1 幸いなポリュカルポスについてのことは、以上のとおりです。彼は、ヒラデルヒヤから来た人々と共に、スミルナで十二番目に殉教しました。それでも、すべての人から、とりわけ彼ひとりが記憶されています。そのため、異邦人でさえ、いたる所で彼のことを語っているほどです。彼は名高い教師となったばかりではありません。かえって、抜きんでた殉教者ともなりました。すべての人が、キリストの福音にしたがった彼の殉教にならいたいと願っています。19:2 彼は忍耐によって不義な支配者に打ち勝ち、こうして朽ちない冠を受けました。そして、使徒たちとすべての義人と共に大いに喜びながら、全能の父なる神をあがめています。また、わたしたちの主イエス・キリストをほめたたえています。この方は、わたしたちの魂の救い主、わたしたちのからだの舵取り、全世界の公同の教会の牧者です。

20:1 さて、あなたがたは、起こったことをもっと詳しく知らせてほしいと願いました。しかし、わたしたちは今のところ、兄弟マルキオン[1]によって、要点だけをお知らせしました。ですから、これらのことを知ったら、もっと遠くにいる兄弟たちにも、この手紙を送り届けてください。その人々もまた、ご自分のしもべたちの中から選びをなさる主を、あがめるためです。20:2 神は、ご自分の恵みと賜物によって、わたしたちすべてを、ご自分の天の御国に導き入れることがおできになります。ひとり子であるしもべイエス・キリストによってです。この神に、栄光、誉れ、力、威光が、世々限りなくありますように。すべての聖徒たちによろしく伝えてください。わたしたちと共にいる者たちが、あなたがたによろしくと言っています。この手紙を筆記したエウアレストスも、家族そろってよろしくと言っています。

21:1 さて、幸いなポリュカルポスが殉教したのは、クサンティコスの月の二日、二月二十三日、大いなる安息日の午後二時でした[2]。トラレスの人ピリポが祭司長で、スタティオス・コドラトスが地方総督のときに、彼はヘロデに捕らえられました。しかし、そのときの王は、とこしえに治めておられるイエス・キリストでした。この方に、栄光、誉れ、威光、永遠の御座が、代々限りなくありますように。アーメン。

22:1 兄弟たちよ。わたしたちは、あなたがたが、福音にしたがった、イエス・キリストのことばのとおりに歩み、元気でいるよう祈ります。キリストと共に、父なる神と聖霊とに、選ばれた聖徒たちの救いのために、栄光がありますように。幸いなポリュカルポスが殉教したとおりです。わたしたちも、イエス・キリストの御国で、彼の足跡のうちに見いだされますように。22:2 これらのこと[3]は、ガイオが、ポリュカルポスの弟子エイレナイオスの文書から書き写したものです。ガイオは、エイレナイオスと共に暮らした人でもあります。そして、わたしソクラテスは、コリントで、ガイオの写しから書き写しました。恵みが、すべての人と共にありますように。22:3 また、わたしピオニオスは、先に記した写しから、これを書き写しました。幸いなポリュカルポスが啓示によってわたしに示してくださったので、これを捜し出したのです。そのことは、このあとで明らかにします。わたしは、時を経てほとんど朽ちかけていたこれを、集めました。主イエス・キリストが、わたしをも、ご自分の選ばれた者たちと共に、ご自分の天の御国に集めてくださるためです。この方に、父と聖霊と共に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

EP:0 モスクワ写本の別の結び

EP:1 これらのことは、ガイオが、エイレナイオスの著作から書き写したものです。ガイオは、聖なるポリュカルポスの弟子となったエイレナイオスと、共に暮らした人でもあります。

EP:2 実際、このエイレナイオスは、監督ポリュカルポスが殉教したころローマにいて、多くの人を教えました。彼の書いた、たいへん優れた、きわめて正しい著作が数多く伝わっています。その中で彼はポリュカルポスに触れ、自分はポ

リュカルポスから学んだと言っています。そして、あらゆる異端を十分に論駁しました。また、教会の公同の規範を、聖なる人から受けたとおりに伝えました。

EP:3 彼は、次のことも語っています。あるとき、マルキオンが聖なるポリュカルポスに出会いました。マルキオン派と呼ばれる人々は、この者から出ています。マルキオンは、「ポリュカルポスよ、わたしたちを認めよ」と言いました。すると彼は、マルキオンに言いました。「認める。サタンの長子だと認める」

EP:4 また、エイレナイオスの著作には、次のことも記されています。ポリュカルポスがスミルナで殉教したその日その時に、ローマの都にいたエイレナイオスは、ラッパのような声を聞きました。その声は、「ポリュカルポスは殉教した」と言ったのです。

EP:5 そこで、先に述べたとおり、エイレナイオスのこれらの著作から、ガイオが書き写しました。ガイオの写しからは、イソクラテスがコリントで書き写しました。また、わたしピオニオスは、イソクラテスの写しから書き写しました。聖なるポリュカルポスの啓示によって、これを捜し出したのです。わたしは、時を経てほとんど朽ちかけていたこれを、集めました。主イエス・キリストが、わたしをも、ご自分の選ばれた者たちと共に、ご自分の天の御国に集めてくださるためです。この方に、父と子と聖霊と共に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

訳注

1 後に出る異端者マルキオンとは別人。マルコとする写本もある。
2 この章を後の付記とみる説と、手紙の一部とみる説がある。
3 ここからは、後の時代に写した者たちの付記で、手紙の本文ではない。

ポリュカルポスの殉教

2026年11月23日版
著者　スミルナの教会
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/martyrdom-of-polycarp/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/martyrdom-of-polycarp
全文を、ギリシア語原文（Μαρτυρίον τοῦ ἁγιόυ Πολυκαρ́που）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。